世界恐慌

平安 鎌倉 室町 安土桃山 江戸 明治 大正 **昭和** 平成

今日の問い

世界恐慌はなぜ起こり、各国はどのように立ち向かったのだろう。

読み終えたら、最後の「問いへの答え」を見る前に、自分の言葉で答えてみよう。

1 世界恐慌の始まり

株の大暴落

世界恐慌（せかいきょうこう）	1929年に始まり、世界に広がった大不況。
ウォール街（うぉーるがい）	ニューヨークにある株式取引所の街。

第一次世界大戦のあと、アメリカは世界でいちばんの経済大国となり、1920年代には空前の好景気をむかえた。しかし、工場では品物がつくられすぎ、売れ残りが目立つようになった。

1929年10月、ニューヨークの**ウォール街**にある株式取引所で株価が大暴落した。銀行や会社が次々とつぶれ、失業者があふれた。アメリカは世界各国に資金を貸していたため、それをいっせいに引きあげ、不況は各国に広がった。こうして1929年から始まった世界的な大不況を**世界恐慌**という。日本もアメリカ向けの生糸などの輸出が落ちこみ、大きな打撃を受けた。農村では農産物の値段が下がって、人々の暮らしはいっそう苦しくなった。

アメリカの好景気
売れ残りが増える
▶
株価の大暴落
1929年10月
▶
銀行･会社の倒産
失業者が増える
▶
世界恐慌（せかいきょうこう）
各国に波及

2 ニューディールとブロック経済

各国の対策

ニューディール	ローズベルト大統領が行った経済政策。
ブロック経済（ぶろっくけいざい）	本国と植民地で貿易を囲いこむ政策。

1933年、アメリカのローズベルト（ルーズベルトとも）大統領は、**ニューディール（新規まき直し）**とよばれる政策を行った。政府が積極的に経済に関わり、ダムなどをつくる公共事業で仕事を増やし、労働者が労働組合をつくる権利も認めて、景気の回復をはかった。また、農産物がつくられすぎないよう生産を調整して、値段の下落をおさえようともした。

イギリスやフランスは、植民地との貿易を重視して、他国の商品には高い関税をかける**ブロック経済**をとった。広い植民地をもつ国は、これで景気を立て直そうとしたが、植民地の少ない国は苦しくなり、国際的な対立が強まった。ソ連は社会主義の計画経済を進めていたため、恐慌の影響をあまり受けなかった。

国	対策
アメリカ	**ニューディール**（公共事業など）
イギリス･フランス	**ブロック経済**

問いへの答え

1929年、アメリカのウォール街で株価が大暴落して銀行や会社がつぶれ、不況が各国に広がって世界恐慌となった。アメリカはローズベルト大統領のもとでニューディールを行い、イギリスやフランスは植民地との貿易を囲いこむブロック経済をとった。

次は **ノート** で、下線に語句を書きながら確かめよう →

学校・家庭・塾・教室での印刷と配布は自由です。ウェブへの掲載・販売はできません。